

くすりの
散歩道

柴胡

配合処方を持つ多彩な薬理作用

千葉大学 名誉教授

山崎 幹夫

Mikio Yamazaki

●

今から20年も以前の話になるが、肝炎といえば柴胡剤がよく効くといわれて小柴胡湯、あるいは大柴胡湯などが盛んに使われ、一時期にはわが国における柴胡の使用量が中国のそれを超えるという噂が流れるまでになった。結果的には、小柴胡湯など柴胡剤の多用は間質性肺炎等の副作用を惹起する危険性があるということになり、厚生省(当時)の指導が入ったことによって柴胡乱用のブームは終わったのだが、この事件は、正しく診断された「証」に基づく方剤を正しく適用した時にこそ漢方薬は効果を現し、副作用を未然に防ぐという漢方医療の原則を踏み外して、「漢方薬には副作用がない」という迷信

にまどわされた漢方薬の乱用によって生じた現象であったといえるだろう。



この事件は、同じ頃に発生した、中国からの土産としてもたらされた「瘦身茶剤」を安全な漢方薬と思い込み、痩せたい一心で飲用した女性の何人かに死亡例を含む犠牲者を生じた事件と同質であるといえる。実は、これらの瘦身茶剤の正体は、心臓への副作用ありとしてアメリカ合衆国のFDAが使用を禁止した(わが国では市販されていない)食欲抑制薬を秘かに配合していたという“ニセ漢方薬”であった。



漢方医療においては、柴胡はさまざまな処方主薬としてかなり高い頻度で配合されるが、単品で使用されることはほとんどない。『神農本草経』では上品に区分され、味は苦、気は平、主として心腹あるいは腸胃中の病、そこに邪気が結集した結気、飲食の滞り、寒気による痛みが固定して生じる癰、移動する聚、悪寒、発熱を伴う寒熱病などを治し、久しく服すれば身の動きを軽くし、目をあきらかにする等の記載がある。『傷寒論』では、柴胡は急性の発熱等において「胸脇苦満」を診断の指標として用いるとされ、また、胸、脇腹がつまって肋骨の下あたりに重苦しい抵抗感、圧迫感を覚える胸脇苦満の症状は主として肝、胆の障害によって生じるとされたところから、上記のような「肝障害には柴胡剤」というような安易な解釈が生まれ、乱用による被害を生じることになったと思われる。



柴胡の原植物については、中国では産地によって多くの種類が知られており、薬用として地上部を用いる種と根を用いる種とがあるというが、わが国ではセリ科ミシマサイコ属のミシマサイコ *Bupleurum falcatum* L. の根の乾燥品が用いられている。「三島柴胡」の名は、かつて極めて良質なサイコが伊豆三島近辺の草原に自生しており、採取して生薬とされた柴胡が東海道三島の宿を通った旅人たちによって土産物として競って買い求められたため、全国にその名が知れ渡ったことに由来する。



現在では三島近辺には自生品はほとんどなく、静岡、神奈川をはじめ、九州の熊本、宮崎、鹿児島等の各県において栽培されているが需要を満たすには

足りず、多くは中国からの輸入品が利用されている。品質的にはなるべく直根で外皮は黒褐色、内部は黄白色で、乾燥しきらずに湿り気を残し、わずかに芳香があつて油臭がなく、やや苦味を感じるものが良品とされる。あるとき、縁あつて大阪の薬種問屋を訪問する機会があり、これこそが良品の柴胡の見本であるとして見せられた生薬は、それまでに大学で見ていた標本と違って形も色艶も申し分なく見事な柴胡であり、これだけの品質の差が漢方医療のなかで薬効の違いにつながらないはずはないと考えさせられたことを思い出す。



柴胡には約3%に及ぶサイコサポニンと総称するサポニン類が成分として含有されており、柴胡から抽出された粗サポニン分画に関して薬理活性を調べた結果では、小動物に対する中枢神経抑制作用のあることが認められている。前述したように、柴胡は漢方処方では単品では使用されないもので、柴胡の成分に関する薬理活性がそのまま漢方薬としての柴胡剤の薬効につながるとは考え難いが、サイコサポニン類の薬理活性についてはこれまでに中枢神経抑制、抗痙攣、抗潰瘍等の作用を示した数多くの研究結果が発表されている。



なかには、柴胡含有漢方製剤、たとえば柴胡桂枝湯エキスでは抗痙攣作用、麻酔作用が、また柴胡桂枝乾姜湯、小柴胡湯等のエキス剤では血清中の尿素窒素量(BUN値)の減少がみられたという報告もある。柴胡は甘草、黄芩、芍薬との組み合わせで使われることが多いというところから、サイコサポニン(柴胡成分)、ペオニフロリン(芍薬成分)、FM100(甘草成分)などを混合したときの薬理作用を調べたところ、マウスやラットに対して鎮痛作用あるいは抗潰瘍作用を増強する効果がみられたなどの報告もあり、柴胡が用いられている漢方処方の効果に関する近代的薬理学的研究は他の生薬に比べ比較的多い。



しかし、他の漢方方剤と同様に、多種の生薬が複雑に作用しあう処方の中であつて、柴胡の果たす役割についての明確な答えは得られていないし、適応症例の結果を重んじる漢方医学こそが Evidence Based Medicine そのものであるという視点からすれば、ことさら詮索する必要はないのかもしれない。